令和５年度　府中町立府中中央小学校　学校自己評価表【最終評価】

学校教育目標	**自ら伸びる** 「問い直し」を大切にして、教育活動に山場を創り、「生きた言葉」で自覚化して、他者と関わり協力して乗り越えていく	経営理念 ミッション ビジョン	**「学校は子どもが育つ土壌である」（自ら伸びる意思の形成をなす土壌）** 【使　　命】地域と共に児童も大人も共に成長していく機会・場を創造する学校 【経営展望】「教師こそ最大の教育環境」を自覚し、日々の業務の充実と研鑽に励む

ビジョン（中期経営目標）実現に向けての現状（進捗状況）と今年度の位置付け	昨年度は、「問い直し」をキーワードに、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく教育活動を創造してきた。そうした中、個々によって山の高低は異なり、登り方も一律ではないと感じた。授業づくりにおいても、どの学級も授業として成立はしているものの「一斉授業の形態が多いのではないか」「提供されるだけの授業では児童は面白くないのではないか」などの意見が教職員の中から出てきた。また、配慮を要する児童の姿から、**「自ら伸びる意思」は、個の活動によってのみ育っていくものではなく、集団の中で他者と協働しながら共に育っていくものであり、個の育ちと集団の育ちは別物ではなく、問い直したり変容したりと動きながら主体形成をしていく**ことを再認識した。 今実践している教育活動が「子どもが育つ土壌を耕すことになっているか」問い直したとき、本校として価値をおくべきことは、他者と協働しながら、問い直したり変容したりと、動きながら主体形成をしていくことと考えた。 これらのことから、今年度は、一つ一つの機会を安易に消化することなく、「はちの子の心得」や「じまんの俳句」を媒介に問い直しながら、「生きた言葉」を生み出す活動を積み上げて、児童自身がめざすべき山を創り、他者と協働しながら「群れ」から「集団」へと成熟していく過程を大切にしていく。 また、「問い直しのサイクル（学びの型）」を回しながら、集団の成熟とともに個の成長の自覚があるかを問うていき、「自ら伸びる」意思を形成していく大きな原動力となる「創る楽しさを味わう授業や行事」を創造していく。 そのためにも、児童と担任が共に学び合う文化を創っていく学級は、「自ら伸びる意思の形成をなす土壌」でなければならないことから、今年度の学校経営の第一の柱は「a『生きた言葉』が生まれる学級・学年経営」とする。

学校経営の柱に係る考え方

a「生きた言葉」が生まれる学級・学年経営　（学級経営力）	学級・学年づくりを「自ら伸びる意思」の形成につなげるには、「生きた言葉」が集団の成熟を生み出しているかどうかを問うていくことが大切である。「はちの子の心得」や「じまんの俳句」によって「生きた言葉」で語ろうとする児童に、教師が熱を感じながら価値付けていくことで、学級の山場が創られていくと考える。
b「問い直し」のサイクルを意識した授業づくり　（教師の授業力）	学びの創造を「自ら伸びる意思」の形成につなげるためには、創る楽しさを味わう授業かどうか問うていくことが大切である。「問い直しのサイクル」を回しながら、教師が「教えること」を少しずつ手放し、児童が自己決定しながら自己有用感を得ることで、学びの楽しさが創られていくと考える。
c 自己認識を問い直す行事づくり　（児童自治）	行事の創造を「自ら伸びる意思」の形成につなげるためには、学級づくりと授業づくりで得た力が発揮されているかどうか問うていくことが大切である。各種活動（係・当番）や行事を自らの殻をやぶり自らを成長させていく山場ととらえる高学年の姿が低学年のあこがれとなり、学校文化を創造していくと考える。
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり　（地域との協働）	「自ら伸びる意思」を形成する環境を創造するためには、「わが子」だけでなく、「わが子たち」をみていく保護者を増やすことが大切であると考える。コミュニティ・スクール活動を通して、保護者を含めた地域の方が教育活動に参画しながら、学校と地域をかきまぜていくことが「子どもが育つ土壌をつくる」ことにつながると考える。

評価計画（中期経営目標を設定して２年目）

A　中期（３年間）経営目標	B　短期（今年度）経営目標	C　目標達成のための方策	主な成熟度		現状	D　評価指標	目標値（%）	E　評価結果 10月 達成値	E 10月 評価	E 2月 達成値	E 2月 評価
a 「生きた言葉」が生まれる学級を構築する学年経営	児童と教師が共に「生きた言葉」を生み出す学級を創る。	「はちの子の心得」 ２ヶ月ごとに個と集団の姿を問い直しながら、児童と教師が共に学び合う文化を創る。 「じまんの俳句」 一斉の俳句づくりと自由投句に取り組み、暮らしの事実に価値を見つけながら「生きた言葉」を生み出す活動を積み上げる。	4段階	児童も教師も意思をもち、「生きた言葉」を交流しながら問い直すことで新たな山場が創られていく学級。	6年	・「学校楽しいーと」学級集団における適応感 ・「じまんの俳句」自由投句の割合	80% 80%	86.8% 76%	A B	86.7% 83%	A A
			3段階	児童が事実に目を向けながら「生きた言葉」を生み出し、教師はその熱を感じ取って価値付けを重ねている学級。	6年以外						
			2段階	「生きた言葉」で語ろうとしている児童を教師が大切にしている学級。							
			1段階	児童同士がつるむなど個人の意思がなく、集団の課題を見過ごしている学級。							
b 「問い直し」のサイクルを意識した授業を構築する研究推進	自己決定と自己有用感のある授業の在り方について研究する。	・年７回の公開授業や示範授業による相互参観を通して授業力を高める。 ・協働学習と自由進度学習等を効果的に往還させた授業づくりを研究する。 ・一部教科担任制導入により教材研究の時間を確保する。	4段階	児童が学び方を調整・選択しながら自分のタイミングで問い直しを重ね、次の学習や生活に生かしていく授業（自ら学びを創っている授業）	12%	・他者とともに学び合う楽しさを味わう教師の割合 ・学力調査の全国平均３ポイント以上の児童 ・「学校楽しいーと」学習意欲	90% 80% 80%	89.3% － 83.8%	A － A	100% 国語73% 算数71% 理科76% 84%	A C A
			3段階	教師が「教えること」を少しずつ手放し、児童が自分の思いや考えを自由に表現できる授業（教師が児童に学びを託す授業）	78%						
			2段階	児童の意欲を喚起する教材で授業に驚きをもたせ、児童相互が問いを深めている授業（教師の思いがある授業）	10%						
			1段階	教師の発問によって児童が答えを探し出している授業(教科書に沿った授業)							
c 自己認識を問い直す行事の創造	高学年のふるまいが低学年のあこがれとなる行事を創造する。	・係活動、当番活動等を通して暮らしの主体者となる経験を重ねる。 ・たてわり活動（異年齢交流）を通してリーダーを育成するとともに人と関わる喜びを経験する。 ・児童会主催「はちの子 meet」など、中学校の自治活動につながる児童会行事を創る。	4段階	各種活動（係・当番）や行事を自らの殻をやぶり自らを成長させていく山場ととらえ、次の活動に生かしている。		・「学校楽しいーと」自己肯定感 ・「学校楽しいーと」友達関係	85% 80%	77.4% 85.7%	B A	77% 86.6%	B A
			3段階	各種活動（係・当番）や行事において自分の強みや弱みを認識し、自ら選択した役割をやり遂げている。							
			2段階	各種活動（係・当番）や行事において相手の気持ちや立場を理解し、協力して参加している。	○						
			1段階	各種活動（係・当番）や行事にまじめに参加している。							
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり	コミュニティ・スクール活動の充実を図る。	・「いつでも参観日」など日常的に児童の様子や教育活動を知っていただく機会をつくることで学校の応援団を増やしていく。 ・コミュニティ・スクール活動を中学校区で交流し、取組を共有する。 ・地域と連携したカリキュラム・マネジメントを推進する。	4段階	地域と学校が対話をしながら、持続可能な取組を創っていこうとする状態。		・教育活動の満足度（保護者アンケート） ・サポーター活動のべ参加者数（年間）	85% 1、200人	92.3% 1、411人	A A	93.6% 2,191人	A A
			3段階	「自分に何かできることはないか」と当事者意識をもち．楽しく活動に参画している状態。	○						
			2段階	各種たよりを見てサポーター活動に参加するなど、学校の様子を直接見ている状態。							
			1段階	各種たより等が発信されるが、保護者や地域は学校の様子を外から見ている状態。							

評価基準…Ａ：目標達成（９５％～１００％）Ｂ：おおむね達成（８０％～９４％）Ｃ：もう少し（６０％～７９％）Ｄ：できていない（５９％以下）
目標値を１００％として、達成率を計算する。「例　目標値８５％→アンケート結果９２％　→目標値を超えているので評価はＡ

F　結果の分析・解釈・変容（中間　１０月）

a	b	c	d
○昨年度から取り組んできた「はちの子の心得」が定着し、４月のスタートから学年・学級で問い直しを行いながら意識統一して進めることができた。 ○どの学級も毎日帰りの会で振り返りを行い、次に生かしていこうとする姿勢が、学級集団における適応感の向上に繋がっていると考えられる。 ●「学校楽しーと」の結果は、目標値を超えているが、高学年になるにつれてやや低くなっている傾向がみられる。また、同じ学年でも学級によって数値にばらつきがある。 ●個人で振り返りをしていた教師の成熟度を学年で分析した結果、４段階のうち３段階が１年と５年、他の学年は２段階であった。 ○「じまんのはいく」の自由投句は前回の達成率を大きく上回り、投句した人数は643人、投句数は2102句になった。 「自由投句」は、「いつでも誰でも何度でも」を合言葉に今年度より取組んでいるが、１回目は興味関心の高い一部の児童が一人で数多く投句するものの、期間中に一度も投句しない児童も多数いるという実態であった。そこで２回目は、投句状況の中間報告を発表し、俳句を作りたくなるような環境（風土）作りの工夫や児童への働きかけなど、学級担任への指導を促し、児童の創作意欲が高まるように工夫した。それによって、投句総数だけでなく投句する児童数も大きく伸びた。また、投句ポストを学年廊下に設置し、２学期より継続して取組んでいる４学年、野外活動でのさまざまな活動の度に振り返りを俳句で表現させた５学年など、学年ごとの実践例も拡がりを見せている。	○５年・６年・３年で公開授業を行った。国語の説明文では、各学年で身に付けたい力やめざす児童の姿や表現力について考えることができた。自由進度学習（２学期からマイプラン学習と名称変更）では、自己決定と自己調整、自己表現をいつ、どこで、どんな形で発揮させ、見とるかということについて考えることができた。 ○夏季休業中の研修では、教師自身の課題意識や参画意識が高まるよう、グループ分け（全員が語れるよう少人数グループにする・ラウンドスタディを取り入れる・経験年数によりグループを分ける・役割を持たせるなど）や進行役などを工夫し、一人ひとりが授業を創る意識、つまり「自ら伸びる意思」の高揚をねらった。 ●国語科説明文において、各学年でつける力を意識した日々の授業になっているか。 ●自由進度学習（マイプラン学習）において、各学年の取組をどのように共有するか。	○低中学年は、意欲的に当番・係活動に取り組んでいる。高学年は、各行事等で実行委員を募り、取り組んでいる。６年生では、学年当初に「どんな学年集団にしたいか」と学年集会で働きかけ、各学級で話し合い、「思いやりの心をもつ」「相手と分かり合う言葉かけをする」等の目標を掲げ、その目標に向かって懸命に取り組んでいる。１年との仲良し遠足や給食配膳の手伝い、ペア掃除等の際には、１年生に話しかける言葉（特に語尾）に気を付けながら話しかけていた。５年生も、運動会や野外活動に向けて実行委員を立ち上げ、自分達の言葉でめあてを決め、生きた言葉で振り返りを語ることができた。みんなの前で言葉を発する機会が増えてきている。 ●特に５年生では、意欲的に取り組む児童が出てきている反面、そうではない児童との差が目立ってきている。 ●高学年は、自分の弱みに気付けている児童が多い。それを受け入れながら前に進めるようにしていきたい。 ○今年度は、縦割り活動を再開し、７月から縦割り掃除、９月から縦割り遊びを始めた。９月に入ってようやく軌道に乗り始めた。高学年は、リーダーとして困っていることをどうするか、学級でも話し合いながら進めている。縦割り掃除や縦割り遊びで、異学年の交流もでき始めたところである。 ○教科担任制によって、児童の様子を複数の教員で見とることができた。気になる児童やトラブルが起こった時に、複数の教員で取り組むことができている。 ○「はちの子 meet」や児童会行事を、執行部を中心として児童自らが考え、実行することができている。 ○今年度は、クラブ活動の担当として、教員だけでなくゲストティーチャー（地域の方）を招き、運営にも協力していただき、クラブ活動の種類も増え、より楽しく豊かにすることができている。	○今年度は、参観日後に学級懇談会を設けた。１回目は、担任や学級の様子、学級経営に関心をもち参加する保護者が多かった。２回目では、「学校楽しぃ～と」を活用し、集団としての分析とともに個々の学校適応感について説明を行った。懇談会を設けることでより、子どもの様子が分かり、安心感に繋がっていると考えられる。 ●一方で、特別な仕掛けがないと出席者が増えない課題がある。 ○サポーター活動の参加者が確実に増加している。それに伴って CS 活動に理解を示す教職員や児童、保護者も増えている。教職員に対する CS 研修や保護者が自分の得意なことを生かして気軽に参加できる活動（環境活動、授業サポート）などの成果である。また、学校では、児童が安心して校外学習に参加したり、授業を受けたりする様子が見られる。サポーターが学校にいることが日常となり、児童とサポーターがお互いに声かけをするなど関わりが増えている。この活動を中学校区及び地域と交流し、共有することによって学校の現状を知ってもらう機会が増えている。 ○校区連絡協議会や地域活動養成講座の交流などにより、地域の人脈づくりも増え、幅広い知見のもと地域で子ども達を育てる意識の出発点となっている。 ●CS の一員として我が子だけではなく中央小の児童のために何かできることはないかと考えている。77.3%と保護者アンケートの数値の伸びが高まらない。

G　改善方策案

a	b	c	d
○「はちの子の心得」は、学校行事や学年の学習内容、また学級の実態に応じて、２か月ごとに限定せず、常に問い直し、個人と集団での振り返りと評価を行っていく。また学年や学級の掲示板を活用し、伸びを視覚化して価値づけを行い、適応感の向上につなげていく。 ○学年の分析した教師の見取りや今後の取組が、適応感の向上に繋がるよう指導部会や全体で情報を共有し進めていく。 ○「じまんのはいく」では、自由投句において優秀作品を紹介するだけでなく、数多く投句した児童や学級を紹介して評価し、意欲関心を高める。また、数だけでなく「質」も向上させるための手立てとして、「俳句ミニ講座（仮）」を開き、改善するためのアドバイスをするなど個別指導の機会を設ける。 　自由投句以外の俳句作りにおいても、指導資料を準備したり優れた作品を紹介したりして、学級担任の指導の一助となるようにする。 ○学年朝会やことば朝会など、朝タイムや朝会の在り方を検討し、表現力を高める場を設定する。	○国語科においては、児童の実態とつける力を把握して、自己決定と自己表現につなげる授業改善を進める。 ○マイプラン学習においては、自己選択、自己決定、自己表現、メタ認知をする場面とその見取りについて指導部会で共有し、学年に広げていく。 　また、児童の学びを見とる方法として、座席表の活用についてミドルリーダーを中心に研修を深める。 ○今後の全体研修（１年・２年・４年・にこにこ学級）では、個別最適な学びをすすめるため、特別支援学級担任や特別支援 CO に事前に児童の見取りや支援の在り方について相談し、授業を創っていく。	○日々の縦割り掃除や、はちの子デー等の縦割り活動、その他の学校活動で見かけた、児童の頑張っている姿や優しい姿を、名前を呼んで肯定的評価をしていくようにする。また、その児童の担任に、名前と様子を伝えて、担任からも価値づけていく。 ○縦割り班の担当とリーダーで連携を取りながら、縦割り活動がうまくいくようにアドバイスをする。 ○高学年は、意図的に学年集会を取り入れ、児童主体で進めていくことで自治的能力や大勢の前で躊躇なく話す力を高める。 ○スクールサポーターの方々が、縦割り掃除の時間に一緒に活動し、子供達を見守ったり、掃除の仕方に声をかけたりしてくださっている。そのため、スクールサポーターの方々とも連携していき、効果的に活動できるようにしていく。	○学年主任会で学級懇談会の在り方（内容・進め方）を話し合い、さらに学年部で方向性を検討する。特に個が集団との関わりの中で育っていることを保護者が実感できるようにする。我が子だけではなく我が子たちを育てているという意識に繋げられるような懇談会を創造する。 ○CS カリマネの説明会やサポートリーダー研修会を推進するなど、機会の場や研修内容を CS 事務局と共に企画・運営を重ねていく。また、CS 活動後にアンケートを実施し、活動内容や自由意見など参画された方々の思いを大切にしたり参考にしたりして新しい活動を創造する。 ○地域の行事に足を運び、地域との繋がりを深める。CS と地域と学校が互いにできることを行いながら行事を創っていくことで協働できる土台づくりを行っていく。

学校の大きな方向性に照らして：

・授業づくりについて、年度当初は協働学習と自由進度学習の往還を考えていたが、研究が進むにつれ協働学習と自由進度学習は全く違ったスタイルの授業ではないのではないかと考えるようになった。協働学習、自由進度学習のどちらにおいても、児童が自己選択・自己決定をし、それを自己表現につながる授業としていかなければならないのではないかと考えた。また、そのためには、学力調査の結果、児童一人一人の実態と教科の特質に即したつけさせたい力を把握した上で授業を構想していくこと、児童がどんな選択・決定をしたのか等学びの過程をしっかり見取り支援をしていくような授業の在り方を探っていく必要がある。

・「はちの子の心得」「じまんの俳句」の取組や高学年で実行委員形式を取り入れた学校行事・学年行事の取組やこれらの取組における教師の価値づけにより、児童は自分の伸びだけでなく集団としての伸びや集団の中での自分と集団との関わりを問い直し、前向きに暮らしを創ろうとするようになってきた。また、児童同士の関わり合いが増えていく中で児童同士のぶつかり合いも生じるが、その都度教師が双方の思いしっかり受け止めながら、「集団」の中の「個」としての自分に目を向けさせるような指導を行っている。しかし、家庭では、我が子が様々な関わりをもち集団の中で育っていることを実感できにくい。我が子だけでなく集団の中で育っていく我が子たちという視点で児童の育ちを支えていただきたい。そのために、ＣＳやＰＴＡと協働する仕組みを整え、大人の学習機会となるような活動を展開していきたい。

H　結果の分析・解釈（最終　２月）			
a ○全学年で「はちの子の心得」を核にして「生きた言葉」で表現しようとする児童が増えた。例えば児童会執行部の６年児童はノー原稿で自らの考えを全児童の前で述べるなど、普段の授業や暮らしで意識してきたことを行事にもつなげ発揮する姿が見られた。 ○学級担任は「はちの子の心得」が学校教育目標「自ら伸びる」を追求していく基軸となっていることを実感しつつある。教職員自身の「はちの子の心得」の振り返りは次の通り。 ・「はちの子の心得」により子供自身で暮らしを創ろうと意識している。（４年目教員） ・普段の生活や話合いの時「自ら伸びるために…」との言葉が何度も出てくるのは児童自身が意識できているからと思う。（９年目教員） ○暮らしの中から自ら山場を創る児童が出てきた。例えば防災教育を学んだ現５年生は「自分たちで石川県能登半島地震の寄付金を募りたい」と仲間を集め、全児童や保護者に呼びかけるなど行動に移した。このような土壌が学級適応感の向上につながっていると考える。 ●登校しにくい児童も複数おり、教室に行けない児童は個別教室で対応している。高学年で適応感を維持していくためにも、中学年までに学校不適応を解消する手立てが必須である。 ○「じまんのはいく」は、本校の文化として定着し、今年度はより「生きた言葉」が躍動する作品が数多く生まれた。 自由投句も様々な働きかけで一定数の投句があったが、今後も学年の実態に応じた指導や助言を積み重ねることが必要である。	b ○全教職員が教材研究や授業研究で「楽しさ」を味わい、教師の本分である「授業」について協働的な学びができた。この成果を支える取組は次の通り。 ①４月当初、理科での授業開きを公開し、学習規律・授業はみんなで創るという意識の醸成を投げかけた。②各学年で自由進度学習に取組み、個別の手立てを具体的に行った。③各学年４～５学級という利点を生かし、事前・事後の授業研究ができた。④教科担任制による教材研究の深化。⑤特別支援 CO や担任による児童の見取りと手立ての工夫。⑥10 月３・４年生児童が６年理科を参観し、話し合いのスキルを学んだ。 ○児童の学習意欲は、やはり「分かった」「できた」という日々の積み重ねにより継続し、新たな課題に対しても「やってみたい」という主体性につながる。国語やマイプラン学習、山場となる行事への向かわせ方、そして自分の学びや暮らしを振り返らせ、評価するサイクルがより良く機能した。 ●標準学力調査結果は目標達成には及ばなかった。しかし、全国平均以上の児童達成値は国語 84%，算数 85%，理科 84%であった。また，国算理 16 教科中，13 教科で「思考・判断・表現」が全国平均を上回った。これは，「生きた言葉」の取組や説明文での「書く・話す活動」、マイプラン学習での資料の活用やまとめる活動などの成果だととらえている。これらの成果を生かし、今後はＣ層の児童への手立てではなく、一人一人の学び方＝「個別最適な学び方」に注目し、学習において困り感の高い児童の「伸び」を見ていきたい。 ○今年度の取組から「協働的な学び」と「マイプラン学習（自由進度学習）」の往還という見方が、相互が作用し各々の学びが響き合う「互恵的な学び」という見方に変わってきた。さらに深い学びを目指すには，より協働（話し合う・対話する）の場の充実が必要であろう。	c ○現６年生の姿は１年間を通して下学年の良き手本となった。この成果を支える取組は次の通り。 ①５年３学期から学年総会等で最高学年への意識を高めた。②４月当初１・６年生のペア遠足を始め、体力テストも１・６年でペアを組むことで下級生をサポートする喜びを得ていった。③１学期途中から縦割活動を稼働することで、全６年児童がリーダーとして自覚化していった。④全教職員で縦割活動時の児童の様子を共有した。児童のよい声かけやふるまいは担当教員から担任に伝えるよう心掛けるとともに、その場で評価（終わってすぐ反省）する場を重ねた。これらの取組により、自己肯定感の数値も友達関係の数値も向上したと考える。 ●６年生以外の児童は、縦割活動で上学年や下学年の姿を見ながら人への接し方や関わり方を学ぶことはできたが、明確な役割がなかった。そのため、友達関係の数値は上がっても、自己肯定感の数値が上がらなかったのではないかと考える。 ●縦割掃除やはちの子デー、児童会行事、はちの子 meet 等、何のために行っているのか、意識の共有が不足していたのではないかと考える。何の力を高めるための取組なのかを意識しながら取り組めば、もっと成果をあげることができたのではないか。 ●合意形成をしながら物事を決定していく意識が弱い。誰かが決めてくれるのを待つのではなく当事者意識をもった話合い活動を充実していく必要あり。	d ○地域とともにある学校づくり、学校を核とした地域づくりフォーラムで本校の実践や提案を発表することができ、本校の取組を外部に発信することができた。 ○教員が CS に学びや育ちが支えられているということを直接、子供達に語ることで、子供達の思いやりや感謝の気持ちを育むことができている。日々の授業においても、CS サポーターの声に耳を傾け、自分達でできることはないだろうかと真剣に考える姿が見られるようになった。高学年を中心に地域の一員としての自覚が伸びつつある。 ○子供達が地域の行事に主体的に参加したりサポーターとして活動したりする姿が見られるようになった。→児童が地域で育てられていることを実感し、役に立ちたい、役に立ったという経験が増え自ら伸びようとする児童が増えた。 ○CS サポーターの活動の幅が広がるとともに参加者も増えた。→安心して学校に通わせることができる。学校の教育活動が見え、子育ての参考になる。などの感想を伺うことができた。CS サポート活動を通して、学校と共に児童を育てている意識が高まってきたと考えられる。 ●学校と保護者、地域とともに子供達を育てるという意識をさらに広げる必要があるのではないか。

I　改善方策案			
a ○「はちの子の心得」を学年・学級の核として取り組みを継続していく。年度初めに学校行事（学年行事）を見通して、学年の目指す学年の姿や教師の姿を明確にする。 ○児童のあるべき姿を教師が「願いとして掲げる」ことと「押し付ける」ことの違いを意識しながら、児童に届く評価について考えていく。 ○「じまんのはいく」の取組を学校文化として継続する。	b ○授業の中で児童のどんな姿を目指すのか、各学年でカリキュラム・マネジメントをしながら、より良い「授業」を目指したい。特に、個別最適な学びのための手立てを具体的に行うこと、協働的な学びのための話し合いのスキルや学級づくりについて学んでいきたい。 ○引き続き特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任、SC、SSW 等の見取りや助言をもとに児童一人一人の伸びが見えるような手立てを探っていく。	c ○６年生以外の児童の役割もはっきりさせ、どの児童も目的意識をもって活動できるようにする。 ○活動の目的を教職員全体で共有し、学級や授業で得た力が発揮できるように意識して取組んでいく。 ○話合い活動を充実させ、合意を導く力を育む。	d ○学校、家庭や地域、CS とともに PTA の在り方や仕組みについて議論していき、持続可能な取組を目指す。 ○地域とともにある学校づくり、学校を核とした地域づくりを推進するために CS と地域学校協働活動の一体化を図るゆるやかなネットワークづくりの場を工夫していく。→アウトリーチ型支援の場を増やす。（保護者が集まる場所に支援者が出向き情報を提供）

学校の大きな方向性に照らして：

・「はちの子の心得」が学校教育目標「自ら伸びる」を追求していく際の基軸となっていることを、教師が実感しながら児童とともに暮らしを創っていくようになってきている。さらに、児童自身がどんな自分（自分達）になりたいか、そのためにどんな暮らし（学び）やどんな学校をつくっていくのかを意識しながら生活していけるようにしたい。例えば、「あいさつ」「無言掃除」など、「これだけはどこの学校にも負けない」と児童が胸を張って言える学校文化を児童の手でつくっていく。児童自身が、合意形成をしながら自分（自分達）の暮らし（学び）や学校文化をつくっていく過程を踏んでいくことで、自分（自分達）がその主体者であると意識していくのではないか。また、教員は、合意形成の場を意図的に設定し、児童に方法を学ばせていくようしなければならない。

・授業においては、年度当初、協働学習は「一つの課題をペアやグループなど様々な形態を用いながら、全員で深めていく授業」、自由進度学習は「一人一人が各々のペースに合わせて学習を進めていく授業」というイメージで、全く違ったスタイルの授業であると考えていた。しかし、協働学習の中にも、自己選択・自己決定の場面があるということや自由進度学習の中にも協働的に学ぶ場面があるということを認識した。どちらにおいても学習を通してどんな力をつけたいのか、児童のどんな姿を目指すのかを明確にして、授業をつくっていかなければならない。そのためには、教師自身も協働的に教材研究を行なったり、児童一人一人の学びの見取りや個に応じてどのように支援をするのかを対話したりしなければならない。教師もリーダーを中心として、「自ら伸びる（学ぶ）意思」や仕組み（メンター制）をつくっていく必要がある。

・学校が何に取り組もうとしているのか、どんな子供を育てようとしているのかを保護者や地域に理解してもらい、学校の応援団としてともに「自ら伸びる」子供を育てていきたい。そのために、CS と PTA が協働して保護者が集まる場を提供し、その場を借りて学校の取組や願いを発信していく。

学校関係者評価を受けての改善方策（修正）
今年度の学校自己評価に対して、学校関係者評価では、全体を通して概ね「適切である」との評価であった。自己評価表を現在の形式に変更して２年。この間、実践を通して府中中央小教育の形成プロセスを自分たちで評価し、その評価に係る語りを学校運営協議会委員に聴いていただくことで、委員全員に学校の方向性を共有していただいていると感じている。ただし、目標を達成することを目的として方策等の手立てを打つのか、どこまでも「自ら伸びる意思の形成」＝耕しをねらって目標をとらえ手立てを打つのかでは教育の方向性に違いがでる。つまり、学校が講じている手立ての適切さには考察が及んでいるが、講じている教師自身の子供や環境への目の向け方、捉え方、考え方までは考察が至っていないのが現状である。このことからも、今一度、本校の「子供観」を明確にしておくべきとの意見を学校運営協議会でいただいた。ついては、３月の企画委員会で「本校の子供観」の明確化に向け、「子供をどのような存在としてみるか」というまなざしの向け方について各分掌主任等が熟考したところ、**「子供は発達の当事者であり、未来の大人として敬意を払う存在」**との考えに至った。 したがって、学校が作成した改善方策（上記 I）に基づき次年度の学校を運営していくが、本年度末に明確化した子供観を共有しながら、個々の子供の発達の可能性を見出しつつ、その子の根っこを太らせていく教育を追求していく。